【278】

氏　名（本籍）	塚田泰彦（滋賀県）
学位の種類	博　士（教育学）
学位記番号	博乙第 1637 号
学位授与年月日	平成12年7月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	教育学研究科
学位論文題目	読みの教育における語彙意味論的方法の研究

主　査	筑波大学教授	博士（教育学）	桑原　隆
副　査	筑波大学教授	学術博士	斎藤佐和
副　査	筑波大学教授	博士（教育学）	大髙　泉
副　査	筑波大学助教授	博士（心理学）	庄司一子
副　査	筑波大学助教授	博士（教育学）	茂呂雄二

論文の内容の要旨

本論文は，①わが国の国語科教育における読みの指導の課題を歴史的に明らかにするとともに，②その課題について，内外の最近の認知論的研究を摂取しながら，読みの新しい指導の方法を開拓し，③その方法の有効性について実証的な調査研究を行うことを目的としている。主として，第一章（読みの教育の現状と問題の所在）及び第二章（パラダイムの検討による研究課題の定位）において，わが国の読みの指導における問題を歴史的に究明し，研究課題を明らかにしている。続く第三章（読みと語彙知識の関係－課題解決の原理的展望）及び第四章（読みの教育と語彙意味論的方法の関係－課題解決の方法的展望）において，その課題に対する新たな読みの方法を提示し，第五章（読みの学習における意味マップの有効性）では，その方法について実証的な調査研究を行い，有効性及び問題点を明らかにしている。

これまでのわが国の国語科教育における読みの指導は，読解指導中心で，その読解指導は作者や作品を中心，あるいは重視した指導であった。作者の主張や意図，作品の主題や内容の受動的な理解に重きが置かれ，そこでは読み手としての読者の能動的な働きかけが軽視されてきた。他方，読者中心の読書指導も提唱され一時期実践されたこともあったが，読書指導は国語科教育における実践としては必ずしも十分な展開をみせたとはいえず，読解指導と読書指導が調和的，統合的な展開をみせたというよりは，むしろ読解と読書の二極化を招いてきた。加えて，大正期のセンテンス・メソッド等の主張やその後の解釈学的読解理論の重視によって，文章や作品における語レベルの問題が過小評価され，また読者の側の位置づけもあまり問題にされてこなかった。戦後の読解指導の理論の典型として沖山光の読解理論を位置づけることができるが，沖山理論の問題あるいは限界は，文章や作品のパラディグマティックな関係を十分に取り込んでいないことである。このことは，沖山理論だけでなく，わが国の読解指導が抱えている問題でもある。以上の歴史的究明から，読解と読書を二極的にとらえるのではなく，しかも文章や作品の語レベルの問題を軽視することなく，読み手としての読者の能動的な意味構成行為を重視した読みの方法を開拓することを研究課題として設定している。そして，この課題への具体的な研究方法として，「語彙知識」という視点を設定し，文章の語彙構造との関連において，読者の既有知識をいかに賦活化させ，取り扱ったらいいかという実践的な課題を設定している。

読者がすでにもっている語彙知識を基盤とした読みの方法を，筆者は語彙意味的方法と位置づけている。その語彙意味論的方法とは以下のような方法である。

文章はある意味内容を伝達する一つの意味構造体であり，この構造は，ミクロな構造を中心にして，概念的意味ネットワークと命題的意味ネットワークから成り立っているとみる。そして，前者の概念的意味ネットワークに着目し，文章の骨格を成すものとして位置づける。概念的意味ネットワークは語彙論的側面に主に対応し，命題的意味ネットワークは文法論的側面に対応するものである。これまでの読みの理論では，後者の文法論的側面（命題的意味ネットワーク）に議論が集中し，そのため文章が語彙のネットワークから成立しているという基本的な特質が注目されないか，あるいは軽視されてきた。このことは，文章におけるシンタグマティックな側面にくらべて，パラディグマティックな側面の軽視ということでもある。そこで，文章は語彙を中心とした意味のネットワークとして成立しているとする立場から言語表現規則（文法）にアプローチしようとする研究を語彙意味論と位置づける。また，そのアプローチによって文章の語彙構造に関与しつつこれを表現する方法を語彙意味論的方法として位置づける。語彙知識の表現の一つの手法が意味マップである。語彙意味論的方法は，読者の既有知識を表現する方法でもある。したがって，文章や作品を読むということは，対象となる文章や作品の語彙構造を中心として意味を理解すると同時に，そこに読者の類似する既有の知識構造，すなわち語彙構造を重ね合わせていくことになるのである。

第五章では，語彙意味論的方法の一つである意味マップ法を詳細に検討し，概念的意味ネットワーク，すなわちパラディグマティックな側面に焦点を合わせてその実践的調査研究を行っている。国語科研究において，意味マップ法を活用した本格的な実践研究はまだ行われていない。調査研究における教材は，説明的文章として「人間の体温調節」を使用し，小学校及び中学校において予備調査を行ったあとで，本調査を中学校において行い，意味マップ法の有効性と問題点を明らかにしている。

研究成果は以下の通りである。

①－わが国の国語科教育における読みの指導に関して，大正期のセンテンス・メソッドの主張やその後の解釈学理論に基づく読みの読解指導が，作者や作品中心で，読者の位置を軽視してきたことを歴史的に緻密に明らかにしたこと。②－同時にその読解指導が，文章の語レベルの問題，とくにパラディグマティックな語彙の問題を疎かにしてきたことを明らかにしたこと。③－①②の問題を踏まえ，読むという行為は，読者が作者や作品に能動的に働きかける意味構成行為であることを，認知論的研究を踏まえて提唱したこと。④－③の意味構成行為をさらに②のパラディグマティックな語彙の軽視という問題と結びつけ，文章及び読者の両者の語彙知識の構造と基準とした語彙意味論的方法を理論的に提唱したこと。⑤－④の語彙意味論的方法の具体的方法として，意味マップ法に着目し，小学校・中学校における予備調査及び中学校における本調査によって，その有効性を実証し，問題点を明らかにしたこと。

審査の結果の要旨

わが国の国語科における読みの指導の歴史的究明において，読者の位置づけや語レベルの問題点を新たに浮き彫りにした。この究明は，これまでの歴史的研究にはなかった視点であり，高く評価できる。さらに，読者及び語レベルの視点を重視することから，内外の認知論的研究を緻密に踏まえ，読みの指導方法として語彙意味論的方法を提示した。この語彙意味論的方法は，著者の独自の提唱であり，とくにパラディグマティックな視点から，文章や作品と読者の語彙知識構造を重視したアプローチは注目に値するものである。また，語彙意味論的方法の具体的方法として，意味マップ法を取り入れて，その実証的調査研究を行い，その有効性と問題点を明らかにした。このことは，読み手の能動的な意味構成行為を積極的に位置づけた読みの新しい実践方法としての価値に加えて，新たな研究方法を開拓するものとして高い価値をもつものである。

実証的な調査研究においては，意味マップ法の対象として取り上げた文章のジャンルや，年齢の発達段階における有効性の吟味等，今後の課題としての問題もあるが，本論文は十分に優れた論文であることが認められる。

よって，著者は博士（教育学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。